九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

未習フランス語学習者における動詞活用の習得について

羽賀, 賢二
Institute of Languages and Cultures

https://doi.org/10.15017/5509

出版情報：言語文化論究. 11, pp.129-139, 2000-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

未習フランス語学習者における動詞活用の習得について

羽　賀　賢　二

1．初めに

近年，未習外国語としてフランス語を教える上で，数字や動詞の活用といった暗記項目に多くの時間を割かなければならないことが多い。この種の項目，すなわちその概念の把握にはなんら困難はないが，機械的な反復練習を通して習得しなければならない事柄は，授業時間の制約上，ある程度までは自宅学習に廻さざるを得ない。ところが，その習得結果を確認してみると不十分であることが多い。これは，学習が不足している学生本人にとっても問題であるが，自宅学習が十分できている学生の足を引っ張り，授業のペースを落とすという意味でも大きな問題であるといわねばならない。

近年，学生の学習能力，とりわけ自宅での学習能力の不足を指摘する声が高い。ある程度までそれは本当であると思うが，それを声高に叫ぶだけではなんの改善にもつながらないであろう。学生の学習能力の現状を把握して，それに見合った教授法，指導法を見つけ出す必要があろう。

このような意図で，本年度（1999年度）前期に，未習フランス語（フランス語Ｉ）の履修者に対して，夏季休暇を利用して動詞の活用（直説法現在形）の到達度テストを実施した。未習外国語としてフランス語を学ぶ学生に，如何にしたら効率的に動詞の活用を習得させることができるかについて，なんらかの手掛かりを得るためである。

2．テストの内容

「対象学生」

対象としたのはフランス語Ｉの２クラスの履修者で合計96名である（以下Ａクラス，Ｂクラスと略記する。Ａクラスは38名で，内訳は経済学部23名，農学部10名，歯学部４名，再履修者１名；Ｂクラスは58名で，内訳は文学部22名，工学部34名，再履修者２名であった)。ただしこのうち何名かは，最初あるいは途中から受験を放棄したため，全員が最後までテストを受けたわけではない。

「対象とした動詞」

フランス語における動詞活用の重要性については授業を通して十分に説明し，学生もその点についてはよく了解したと考える。テストの対象は下に挙げた50の動詞の直説法現在形に限った。従来は，せっかくテストを実施するのだからと，あれもこれもと盛り込むことが多かったのであるが，近年の学生には負担過剰になっているように思われたため，最小限に制限した。テストの形式は，動詞の直説法現在形の活用を書かせる筆記試験の形を

取った。本来であれば口述試験の方が望ましいのであるが，なにぶんにも人数が多く，時間的に不可能であった。１つの動詞の活用形のうち，誤りが１箇所だけの場合は，準正解として扱った。アクサンやアポストロフの誤記も誤りとしてカウントした。

avoir être aimer finir acheter aller appeler asseoir battre boire conduire connaître courir craindre croire devoir dire écrire employer envoyer faire falloir fuir lire manger mettre mourir naître ouvrir partir payer placer plaire pleuvoir pouvoir préférer prendre recevoir rendre résoudre rire savoir suffire suivre vaincre valoir venir vivire voir vouloir

「テストの進め方」

学生に対しては，６月の初めに，テストの内容と第１回目のテストを7月初めに行うことを周知しておいた。更に，このテストは一定のレベルに到達するまで何回でも受けなければならない到達度テストであること，第2回目以降のテストは夏季休暇に食い込むこと，および，最後まで一定レベルに到達しない者はフランス語Ｉの評価対象者から除外することを周知した。

３．テスト結果

(1) 第１回テスト（７月９日実施）

20題出題で16題以上正解をを合格とした。なおＡクラスとＢクラスは時間帯が異なるため，出題した動詞は同じものではない。

Ａクラス

在籍者38名，受験者数26名（受験率68.4％），合格者6名（15.8％），不合格者20名（52.6％），非受験者12名（31.6％）

（学部別内訳）

経済学部：在籍者23名；受験者13名（56.5％）［合格者2名（15.4％），不合格者11名（84.6％）］，非受験者10名（43.5％）

農 学 部：在籍者10名；受験者９名（90％）［合格者４名（44.4％），不合格者５名（55.6％）］，非受験者１名（10％）

歯 学 部：在籍者４名；受験者３名（75％）［合格者０名（０％）］，非受験者１名（25％）

再履修者：在籍者１名；受験者１名（100％）［合格者０名（０％）］

不合格者のテスト結果分布：

正解数５題以下11名（55％）　６～10題３名（15％）　11～15題６名（39％）

Ｂクラス

在籍者58名；受験者数44名（受験率75.9％）［合格者７名（12.1％），不合格者37名（63.8％）］，非受験者14名（24.1％）

（学部別内訳）

文 学 部：在籍者22名；受験者18名（81.8％）［合格者４名（22.2％），不合格者14名

(77.8%)]，非受験者4名（18.1%）
工 学 部：在籍者34名；受験者26名（76.5%）［合格者３名（11.5%），不合格者23 (88.5%)]，非受験者8名（23.5%）
再履修者：在籍者２名；非受験者２名（100%）
不合格者のテスト結果分布:
正解数５題以下23名（62.2%）　６～10題12名（32.4%）　11～15題２名（5.4%）

第１回テストで最も意外であったのは合格率の低さであった。この原因として考えられることは，この日にテストを実施することが指示してあったにもかかわらず，学習が不十分であったために，間に合わなかったのではないかということである。それにしてもあまりにも出来が悪いのに愕然たる思いであった。

さらに，不合格者の成績についても，上の数字から分かるように，５題以下しか正解を書けなかった者が両クラスとも過半数に達していた。

(2) 第２回テスト（７月19日実施）

30題出題して25題以上正解を合格とした。夏季休暇に入ったため，学生にもそれぞれ事情があることを考慮して，テストは今後数回実施すること，都合により今回のテストを受けることができない者は，次回のテストを受ければよいとした。２クラスをまとめてテストしたために，問題は同一であるが，結果は，クラス別の分析を行うためにＡクラスとＢクラスに分けて表記する。

Ａクラス
受験者18名：合格者７名（38.9%），不合格者11名（61.1%）
(学部別内訳)
経済学部：受験者14名［合格者４名（28.6%），不合格者10名（71.4%)]，非受験者７名
農 学 部：受験者５名［合格者４名（80.0%），不合格者１名（20.0%)]，非受験者３名
歯 学 部：非受験者４名（100%）
再履修者：非受験者１名（100%）
(注)・受験者中５名（27.8%）は第１回テストを受験していない（合格者０名；０%）。
・第１回テストの不合格者の中で，第２回テストを受験しなかった者が８名いた。

Ｂクラス
受験者37名：合格者21名（56.8%），不合格者16名（43.2%）
(学部別内訳)
文 学 部：受験者16名［合格者８名（50%），不合格者８名（50%)]，非受験者２名
工 学 部：受験者21名[合格者13名（61.9%），不合格者８名（38.1%)]，非受験者10名
再履修者：非受験者２名（100%）
(注)・受験者の中の９名（24.3%）は第１回テストを受験していない（うち合格者７名; 77.8%)。
・第１回テストの不合格者の中で，第２回テストを受験しなかった者が９名いた。

第２回テストから夏季休暇に入った。学生たちも本当に夏休みが潰れると心配したのかもしれない。ようやく本気を出したようである。全体的な合格率は，Ａクラスで38.9％，Ｂクラスで56.8％に達した。両クラスの間にこれだけの差が出たのは，上の表からはっきり分かるように，経済学部の学生の成績の悪さに原因がある。

Ｂクラスでは，第１回のテストを受験せずに第２回テストを受けた学生９名のうち実に７名が合格している。この事実は，真剣に学習すればこの程度の学習内容は１週間から10日間もあれば，習得が可能であることを証明している。

第１回テストについては，あまりにも成績が悪かったため，出題した動詞と正答率との関係を分析しなかった。ここで，第２回テストににについて，この関係について述べておこう。なお，テストの合否判定においては，既に述べたように，１問中に間違いが１箇所だけの場合には準正解として扱ったが，この分析においては，厳密に１箇所も間違いのない解答だけを正解とカウントした。以下，正答率の高かった順に並べる。

battre（正答率87.3％），manger（85.5％），finir（81.8％），avoir（80.0％），courir（76.4％），appeler（74.5％），rendre（72.7％），préférer（70.9％），naître（70.9％），payer（69.1％），aller（69.1％），suivre（69.1％），pertir（67.3％），falloir（67.3％），croire（63.6％），lire（63.6％），pleuvoir（63.6％），boire（61.8％），prendre（61.8％），vouloir（61.8％），connaitre（60.0％），devoir（58.2％），employer（58.2％），rire（58.2％），mourir（54.5％），venir（54.5％），recevoir（59.1％），plaire（38.2％），faire（34.5％），érire（34.5％）

上記の数字を以て，動詞の活用パターンと正答率との関係について何らかの仮説をたてることは無理のようである。今後のデータ集積に待ちたい。ただし，フランス語の運用能力の養成という観点からすれば，faire のごとき基本動詞の活用が修得されていなければ問題にならないことは明らかであり，これらについて学生が完璧に習得するように，なんらかの手段を講じる必要がある。

(3) 第３回テスト（７月28日実施）

30題出題で25題以上正解を合格とした。

Ａクラス

受験者13名；合格者６名（46.2％），不合格者７名（53.8％）

(学部別内訳)

経済学部：受験者11名［合格者5名（45.5％），不合格者6名（54.5％）］

農 学 部：受験者２名［合格者１名（50.0％），不合格者１名（50.0％）］

Ｂクラス

受験者17名；合格者14名（82.4％），不合格者３名（17.6％）

(学部別内訳)

文 学 部：受験者７名［合格者５名（71.4％），不合格者２名（28.6％）］

工 学 部：受験者10名［合格者９名（90％），不合格者１名（10.0％）］

この第３回テストでも，クラス間，学部間で差が認められた。農学部の受験者は２名にすぎないのでここではおくとしても，経済学部学生の成績の悪さが目立つ。

(4) 第４回テスト（８月10日実施）

20題出題で16題以上正解をを合格とした。

Ａクラス
　受験者７名：合格者７名（100％）
(学部別内訳)
　経済学部：受験者４名［合格者４名（100％)］
　農 学 部：受験者２名［合格者２名（100％)］
　再履修者：受験者１名［合格者１名（100％)］

Ｂクラス
　受験者４名：合格者４名（100％）
(学部別内訳)
　文 学 部：受験者３名［合格者３名（100％)］
　工 学 部：受験者１名［合格者１名（100％)］

今回のテストでは受験者全員が合格点に到達した。そのため，今回のテストもって最終回とした。ただし，なんらかの都合により受験できなかった者がいる可能性（たとえば外国人留学生で夏季休暇に帰国する学生が１名いた）を考慮して，定期試験終了後にもう１度確認のために補充試験を実施することとしたが，このことは８月10日時点では学生に通知していない。

要するに，最初から受験しなかった学生と途中で棄権した学生を除けば，最大で４回のテスト，期間的にはおよそ１カ月間で，合格レベルに到達したことになる。

(5) 補充試験

第４回テストまで受験した学生は全員が合格したのであるが，非受験者がまだ残っていたため，定期試験終了後の再調査期間を利用して，最後の補充試験を10月１日に実施した。既に対象となる学生の数は少なくなっているし，動詞の活用は本来口述試験で行うのが望ましいことを考慮して，受験希望者を１人ずつ試験室に呼び入れて，口述方式によってテストした。10名受験者があったが，その内訳は下の通りであった。

　Ａクラス７名（経済学部３名，農学部１名，歯学部３名）
　Ｂクラス３名（文学部１名，工学部２名）

　それまでに受験したテスト回数０回の者：１名
　　〃　　〃　　〃　　１　〃　：８名
　　〃　　〃　　〃　　２　〃　：１名

4．考察

(1) 結果のまとめ

４回のテストの結果をクラス別，学部別にまとめておく。

Ａクラス（登録者数38名）

第１回受験者26名；合格者６名（対登録者比合格率15.8％；対受験者比23.1％）
第２回受験者18名；合格者７名（対登録者比18.4％；対受験者比38.9％）
第３回受験者13名；合格者６名（対登録者比15.8％；対受験者比46.2％）
第４回受験者７名；合格者７名（対登録者比18.4％；対受験者比100％）

(学部別内訳)

経済学部（23名）

第１回受験者13名；合格者２名（対登録者比8.7％；対受験者比15.4％）
第２回受験者14名；合格者４名（対登録者比17.4％；対受験者比28.6％）
第３回受験者11名；合格者５名（対登録者比21.7％；対受験者比31.3％）
第４回受験者４名；合格者４名（対登録者比17.4％；対受験者比100％）

農 学 部（10名）

第１回受験者９名；合格者４名（対登録者比40.0％；対受験者比44.4％）
第２回受験者５名；合格者４名（対登録者比50.0％；対受験者比80.0％）
第３回受験者２名；合格者１名（対登録者比20.0％；対受験者比50.0％）
第４回受験者２名；合格者２名（対登録者比20.0％；対受験者比100％）

歯 学 部（４名）

第１回受験者３名；合格者０名（対登録者比０％；対受験者比０％）
第２回受験者０名；合格者０名（対登録者比０％；対受験者比０％）
第３回受験者０名；合格者０名（対登録者比０％；対受験者比０％）
第４回受験者０名；合格者０名（対登録者比０％；対受験者比０％）

再履修者（１名）

第１回受験者１名；合格者０名（対登録者比０％；対受験者比０％）
第２回受験者０名；合格者０名（対登録者比０％；対受験者比０％）
第３回受験者０名；合格者０名（対登録者比０％；対受験者比０％）
第４回受験者１名；合格者１名（対登録者比100％；対受験者比100％）

Ｂクラス（登録者数58名）

第１回受験者44名；合格者７名（対登録者比合格率12.1％；対受験者比15.9％）
第２回受験者37名；合格者21名（対登録者比36.2％；対受験者比56.8％）
第３回受験者17名；合格者14名（対登録者比24.1％；対受験者比82.4％）
第４回受験者４名；合格者４名（対登録者比6.9％；対受験者比100％）

(学部別内訳)

文 学 部（22名）

第１回受験者18名；合格者４名（対登録者比18.2％；対受験者比22.2％）

第２回受験者16名；合格者８名（対登録者比36.4％；対受験者比50.0％）
第３回受験者７名；合格者５名（対登録者比22.7％；対受験者比71.4％）
第４回受験者３名；合格者３名（対登録者比13.6％；対受験者比100％）
工 学 部（34名）
第１回受験者26名；合格者３名（対登録者比8.8％；対受験者比11.5％）
第２回受験者21名；合格者13名（対登録者比38.2％；対受験者比61.9％）
第３回受験者10名；合格者９名（対登録者比26.5％；対受験者比90.0％）
第４回受験者１名；合格者１名（対登録者比2.9％；対受験者比100％）
再履修者（２名）
再履修者２名は初めから１回も受験しなかった。

(2) 合格者について

既に個々のテストについて言及した点もあるが，合格者については下記の点が注目される。
① 第１回テストの合格率が予想よりも大幅に低かったこと。
② それにもかかわらず，およそ１カ月の間にはほぼ全員が合格レベルに到達したこと。
③ 教室での授業や指示には差がないのに，クラス間や学部間で差が認められたこと。

上記の諸点について，それぞれ感じたことを述べておきたい。

① 第１回テストの合格率が予想よりも大幅に低かったことについて

既に上に述べたことであるが，これには正直なところ驚かされた。事前の予想では，半数くらいは第１回テストで合格ラインに到達するのではないかとおもっていたのであるが，案に相違した結果であった。

受験者に対する合格者の比率は，最高が農学部学生の44.4％でありこれはまあまあのレベルといってよいであろう。文学部は22.2％で漸く２割のラインに達したが，従来文学部の学生のレベルはこれよりはるかに高かったとおもう。それ以外の学部は１割台，歯学部にいたっては学生数が４名であることを考えても１名も合格者のいないのは意外でもあるし，遺憾であった。

この方式によって動詞活用の達成度テストを実施することは，既に6月初めには指示してあったし，その後も繰り返し授業の中で連絡しておいたのであるから，長期的に怠業していない限り，知らなかった学生はいないはずである。また，50の動詞の中には avoir や être のように，既に授業で繰り返し接しているものも多いことを考えると，やはり学生の学習力が低下しているとみなさざるを得ない。

察するに，一定レベルに到達するまでは，何回でもテストを繰り返すという指示を，一度失敗しても，その後で挽回の可能性があると解釈したのかもしれない。

② およそ１カ月の間にはほぼ全員が合格レベルに到達したことについて

第２回テストからは学生も真剣になったようであった。対受験者合格率はＡクラスで38.9％（第２回），46.2％（第３回），Ｂクラスで56.8％（第２回），82.4％（第３回）と徐々に上昇した。とくにＢクラスで成績向上が顕著であった。第２回および第３回テスト

では30問中25問以上で合格というかなり高い合格ラインを設定したが，特にＢクラスでは成績はよかった。

③　クラス間や学部間で差が認められたことについて

Ａクラスについては，経済学部の学生と農学部の学生との間に明らかに差が認められる。Ｂクラスについては，第１回テストは文学部学生の方がよかったが，第２回および第３回テストの結果は工学部学生の方が上回った。また，両クラスとも，第２回テストで満点あるいはそれに近い点数をとった学生がかなりの数に上ることから考えて，今回のテストが，本学の大多数の学生にとって，そもそもそれほど困難なものではなかったということができるとおもう。

また，学生は学部単位，所属クラス単位で共同行動を取る傾向が強いようである。それがプラスの方向に向けばよいのであるが，あまり感心しない方向に出た例も感じられた。たとえば，歯学部の学生は４名であったが，このうち１名は１回も活用テストを受験せず（ただし定期試験は受験して不合格となった），残りの３枚は最初の第１回テストに不合格になった後，３名とも最後まで受験しなかった。最終の補充試験を実施しなかったら，棄権とみなすところであった。

(3) 不合格者について

非受験者（これについては後述する）と途中で受験を取りやめた者（これについても後述する）を除くと，筆記試験（第１回～第４回）を最後まで受験した者に不合格者は１名もでなかった。補充口述試験では数名が合格レベルに達しなかった。第１回から第４回までの全テストを受けた学生は３名だけで，その内容は次の通りであった。

甲君（経済学部）：第１回２/20点；第２回11/30点；第３回16/30点；第４回16/20点
乙君（文 学 部）：第１回１/20点；第２回19/30点；第３回24/30点；第４回17/20点
丙君（文 学 部）：第１回０/20点；第２回16/30点；第３回21/30点；第４回19/20点

上のテスト結果の経緯をみれば，この種の事柄が苦手な学生であっても，４～５回繰り返しテストを課すことによって，合格レベルに到達させることができるといえよう。

(4) 非受験者について

１回もテストを受験しなかった学生は次の通りであった。

Ａクラス：５名
(内訳)
経済学部４名（この全員が定期試験を受験しておらず，早い段階で学習を放棄したと考えられる）
歯 学 部１名（定期試験は受験，不合格）

この他に筆記試験を１回も受験せず，補充試験だけを受けた学生が１名（経済学部）あっ

た（定期試験は受験，不合格）。

Ｂクラス：４名（全員再履修者で，定期試験受験せず）
（内訳）
　工 学 部２名（１名は定期試験受験せず，１名は受験して不合格）
　再履修者２名（ともに定期試験受験せず）

(5) 何回か受験したが合格せずに途中で受験を取りやめた者

途中で受験を取りやめ，さらに補充の口述試験も受験しなかった学生はほとんどなかった。

Ａクラス：０名
Ｂクラス：文学部１名（留学生で途中で一時帰国），工学部４名（うち２名は定期試験受験せず，２名は受験したが不合格）

(6) 定期試験との関係

Ａクラス
　経済学部：在籍者23名，定期試験受験者18名，非受験者５名（21.7％）
　農 学 部：在籍者10名，定期試験受験者10名，非受験者０名
　歯 学 部：在籍者４名，定期試験受験者４名，非受験者０名
　再履修者：在籍者１名，定期試験受験者１名

Ｂクラス
　文 学 部：在籍者22名，定期試験受験者22名
　工 学 部：在籍者34名，定期試験受験者31名，非受験者３名（8.8％）
　再履修者：在籍者２名，非受験者２名（100％）

５．結論および改善に向けて

今回のテスト結果の分析から，本学の大多数の学生にとって，直説法現在形の活用を記憶することはそれほど時間のかかることではないと結論できる。事実，第１回テスト（20点満点）で５点以下であった学生は32名であったが，そのうちで第２回テストを受けた者が22名あり，そのなかの９名（40.9％）は合格している。すなわち10日間で最低レベルから合格レベルに到達することが可能だということを示している。

このような学生の潜在能力を活かし，現状を少しでも改善して，フランス語教育の効率をあげるために，現在の教育制度の枠内において実現可能な改善策をいくつか提言しておきたい。

(1) 1クラスの学生数

少なくとも未習外国語の第1学期のクラスでは，学生に動機付けを与えるにせよ，到達度をチェックするにせよ，学生数を30名以下，理想的には20名程度に抑えるべきである。

今回の調査の対象としたBクラスは実に68名であり，これでは懇切な個別指導は不可能であった。

(2) 教材の開発

言語生活の基礎は音声言語であることを考えると，動詞の活用の学習は当然発音から入るべきものである。今回のテストでも，第3回テストにおいては，綴りを書かせるほかに，発音についても調査した（カナまたは発音記号で表記させる筆記試験方式)。また，補充試験は口述試験で行った。ここで明らかになったことは，綴りは正確に書けても正しく発音できない学生が多数いるということであった。動詞活用のシステムが発音上の原則に則ったものである以上，正しく発音できなければ活用システムを体得できないことはいうをまたない。

この点については,授業の中で繰り返し発音に注意を喚起することはもちろんであるが,自宅学習用に適当な教材を開発し，提供することが有効であろう。市販の教材もあるが,個々の授業内容に一致するものではないし，高価でもある。近年，CDやMDなど優れた機能（頭出しやリピート機能など）をもつ機器が学生の間に普及しているから，これに合わせた教材を作成し，安価に学生に提供すればよい。残念なことに，現在九州大学言語文化部あるいは六本松地区にはこのような教材を作成するための設備がない。教育設備としてこの種の機器を導入が望まれる。

(3) フランス語Ⅰのクラスの編成

現在，フランス語Ⅰのクラスは学生の所属クラスをもとにして編成している。この方式に代わって，同一時間帯に複数のフランス語Ⅰのクラスが開講される場合には，その時間帯の学生全員をいくつかの開講クラスに機械的に振り分ける方式を採用すべきであると考える。その理由は下記のとおりである。

- フランス語Ⅰの教科内容は教員による差がそれほどない。
- 学生の人数や構成を均等にすることにより，授業の均質化が容易になるし，評価基準，評価内容の客観化を図ることができる。
- 学生にとっては他学部や他クラスの学生と接触する機会が増えるが，これは全学共通教育の理念に合致するものである。
- 現在ややもすれば学生の間に見られる，主として所属クラスを単位とした幼児的な共同行動を減少させる可能性がある。

Résumé

Comment apprendre la conjugaison des verbes français aux étudiants de première année

Kenji HAGA

Pour les étudiants de première année qui apprennent le français comme deuxième langue étrangère, la conjugaison est sans doute une pierre de scandale. Nous avons fait, pendant l'été 1999, des épreuves de la conjugaison des 50 verbes fondamentaux, jusquà ce que les étudiants aient atteint le niveau requis. La plupart des étudiants y sont parvenus dans un mois. En analysant les résultats, nous avons constaté une différence considérable entre les étudiants de différentes facultés. Nous avons proposé quelques remèdes pour améliorer la situation actuelle.